染香 ぜんこう

福泉寺寺報
令和6年8月
第 125 号
毎月 1 日発行

ホームページ
おて LINE
子ども行事

呼びかけ

「朝の出勤前には『お父さん行ってくるね』、帰ってきたら『お父さんただいま』と必ず言うんです」

お盆参りでこんなお声を聞きました。今年の10月にご主人の七回忌を控え、仏壇の脇に置いてある写真を見ながら、奥様が話してくれました。息子さんは私と同学年で、紆余曲折（うよきょくせつ）を経てお父様の家業を継ぎました。

私はこのお2人だけでなく、先立ったお父さんとも、生前何か通じるものがありました。入院先の緩和ケア病棟に押しかけて、ご家族を戸惑わせてしまったことも思い出しました。

さて、かくいう私も、昨年3人の家族を送りました。そしてまた、先の奥様のように「お父さん…」「おばあちゃん…」「おかあさん…」と呼び掛けては、胸に熱いものを感じたりしています。当然、返事はないのを承知なので、この自分の姿をどのように理解すればいいかとしばらく考えていました。

返事がないのは…

浄土真宗の「ナンマンダブツ」は、阿弥陀さんの「まかせよ」の呼びかけだそうです。私がとなえるので、私から阿弥陀さんに「おまかせします」「お願いします」と言っているように思えるのですが、そうではないというのです。私の口から出るナンマンダブツが、阿弥陀さんの「まかせよ」の呼び声そのものだと、親鸞聖人はおっしゃるのです。

…そうか！どおりで母たちからの返事がないわけだ！と、思いました。

つまり、「私が声をかけたいと思う心」「偲ぶ（しの）心」は、おばあちゃん、前住職、母からもらった心でした。なので、その心をもらった私の呼びかけの方が「返事」となります。向こうから先に働きかけてくれていたんだ、と思ったら、声掛けがいつもより味わい深くなりました。

たしかに、「ただいま」がいつも先とは限りません。「おかえり」が先の時もあります。

そんな話を奥様としていると、七年目の涙を浮かべておられました。

とっても尊いひとときでした。

（住職）

【御伝鈔（ごでんしょう）と御絵伝（ごえでん）】

報恩講の時、向かって左の間に「御絵伝」を掛け、時折『御伝鈔』が拝読されます。『御伝鈔』は本願寺第三代宗主覚如上人によって制作された最初の親鸞聖人の伝記で、非常に格調高い文章ですが、その理解を助けてくれるのが、絵によって描かれた「御絵伝」です。

江戸時代には「御絵伝」による「絵解き伝道」がブームとなり、その効果は絶大であったでしょう。

「一日報恩講」ではなかなか難しいですので、これから福泉寺報恩講もバージョンアップしてまいります。

ちょっと　あたまの　こりほぐし

お盆休みに実家に帰ると、いつも

決まってある花が咲いています。

さて、それはどんな花？

★ヒント：トルコにも同じ花が咲くそうです

おてらより

境内墓地工事、始めます

①無縁墓撤去
②通路の整備
③空き場所を新たに提供

お盆過ぎ～お彼岸以降も騒がしいかもしれません。よろしくお願いいたします。

ラジオ体操最終日に…

夏休みの朝は、土日以外毎日ラジオ体操です。最終日（8／31）は「かき氷食べ放題」「自家製キャラメルポップコーン」「スーパーボールすくい（仮）」など、早朝から元気です。どなたにも、どうぞご遠慮なくお越しください！（かき氷にトッピングしたいものを持参しても、面白いかも）

七日参りのお話

～大切な人を送った人へ～

梅田・専光寺　竹中尚文

いなくなった存在

火葬場から帰ると、虚脱感を感ずることが多いようです。お骨を抱えて「こんなに小さくなって」とつぶやく人も少なくありません。ずっといた人が、いなくなってしまったことをずっしりと感じるのです。

友人がこんな話をしてくれました。いわゆる霊長類の中で、仲間が死んでしまうことを認識するのは多くないそうです。いなくなった者を思うのはヒトと類人猿だそうです。

我々は、いなくなった存在を実感するときに虚脱感を感じたりするのでしょう。死者を偲ぶのは、「存在しない存在」を思うことでしょう。存在しない者の存在として、仏の存在を語りたいと思います。（中略）

母の死

ある夏のことでした。ご門徒の婦人からお寺に電話がかかってきました。受けたのは坊守（ぼうもり）（住職の配偶者）でした。「私はもういくらも生きられないので、後のことをよろしくお願いします」という話でした。

電話を終えた坊守は、すぐに病院に走ったそうです。その夜、私は坊守からその話を聞きました。そのご婦人はかなり重い肝臓疾患のようでした。病室には、二十三歳と十三歳の姉妹と、ご主人のお兄さんがいたそうです。ご主人は六年前に私がお葬式をしました。

一週間ほどして、そのお母様は亡くなりました。悲しいお葬式でした。私は子供たちを直視できませんでした。子供たちは、涙を流していませんでした。受け入れがたい悲しみに直面するとき、夢を見ているような気分になることがあります。また、子供を残していく母の気持ちを思うと、居たたまれませんでした。

七日参りは、子供たちと伯父さんの三人のお参りでした。二七日（ふたなのか）の頃だったと思います。子供たちが、まともに食事をしていないような気がしました。

「ご飯をちゃんと食べているの？」

「食べる気がしない」とお姉ちゃんが答えました。

「それはそうかもしれないけど、無理にでも食べてね」と言って帰りました。お寺に戻ってから、

「手が空いている時に行って、彼女らを食事に連れ出してくれないか」と坊守に頼みました。

翌日、坊守は彼女らを食事に誘いました。どこに行こうかと尋ねると、お姉ちゃんが回転寿司と言ったそうです。お寿司を食べながら、お姉ちゃんが「お父さんが死んでから、初めての外食です」って言ったそうです。

私は、彼女らのお父さんが亡くなってからお参りをする機会が多くなって、この家の状態を想像していました。かなり厳しい生活をしていることはわかっていました。お姉ちゃんは、お姉ちゃんは、病院にかかることが多く、お母さんがよく連れて行きました。しかし、厳しい経済状態ですから、お母さんは自分の病状には目を閉ざしたのかもしれません。多くの親がそうであるように、自分の病気は後回しです。

私は、四十九日の法要で彼女らに話しました。

「あなたたちは、お父さんが亡くなってから、お母さんと一緒にとても苦労をしたね。今回、お母さんが亡くなって、これからの苦労はもっと大きくなるだろうと思います。いろんな人々が助けてくれるかもしれないけど、やっぱりたくさんの苦労をすると思います。

世間では、仏などいないと言う人もありますが。けれどもあなたたちには、仏はいるのです。あなたたちは、お母さんの病室に時間が許す限り通いました。お母さんが、どんな気持ちで亡くなったかを知っているでしょう。あなたたちのことを心配して亡くなったでしょう。あなたたちのことを思っているのは、お母さんだけではありません。お父さんもまた、あなたたちのことをずっと思っているのです。死んで思いが途切れたのではありません。お父さんもお母さんも、あなた方のことを、ずっとずっと思っているのです。

この思いこそがあなた方の仏であると、私は思います。いつも『私は思われている』と感じて生きてください。それが仏と共に生きることであり、仏によって育てられるという生き方だと思います。」と。

仏の存在

私は、坊さんとして人々の悲しみの場に同席します。その悲しみは、単なる悲しみではなく、とてつもなく大きな教えを含んでいます。私は、お参りさせて頂く中で、仏の存在を共に感じさせてもらうのです。